

# 奥会津一山間農村の嫁の里帰り慣行に関する考察

社会学研究科社会学専攻博士後期課程修了

立柳 聡

## 論文要旨

東北地方は伝統的に同族の分布が色濃く、それは家規範や上下的、序列的な秩序、男性重視の価値観と整合的なものである。嫁が婚家を離れて、頻繁（かつ長期）に実家に滞在することは、そうした理想と矛盾するものである。なぜ、こうした地域に頻繁な嫁の里帰り慣行が存在するのか。ムラの社会構造全般を踏まえ、理由を探究した。

この結果、豪雪地帯の過酷な自然環境の下、経済的に小規模な山間農村では、突出した政治力や権威、経済力を有する家が形成されにくく、本家といえども、それは例外ではない。当地には、強い統制力を伴った同族は存在しない。また、生活上や危機的な事態において、近隣の様々な家との協同が不可欠に必要であった。このため、姻戚である家同士の結びつきも強まり、特に、日常生活上の互助協同にも機能して長く維持されてきていた。

結局、頻繁かつ長期な嫁の里帰りは、嫁の婚家にとって姻戚となる嫁の実家とのつながりを強化するものとみられ、ムラの社会構造と極めて整合的であることが判明した。

キーワード：苛酷な自然環境、経済的に小規模な山間農村、同類、姻戚

## 目次

- I 問題の所在
- II 婚出した娘と生家の親との関係をめぐる文化人類学的研究史の要点
  - A 嫁の里帰り慣行に関する研究とその意義
  - B 「オヤシマイ」、位牌分けに関する研究とその意義
  - C 「シュウトノツトメ」に関する研究とその意義
- III 調査地「両原」の概況
- IV 「両原」の嫁の里帰り慣行の実態と特色
- V 「両原」の族制慣行の実態と特色
  - A ムラ・村内婚的嫁入婚と直系制家族

## B 親族とされるもの

- 1 シンルイ
- 2 ジワケ（ジワカサレ）シンルイ
- 3 イチシンルイ
- 4 同類 一対等的な本分家関係一
- 5 エンルイ、または、シンセキ

## C 位牌分け

## VI 考察と結語 —「両原」の嫁の里帰り慣行の背景と本質—

### I 問題の所在

本論文は、福島県昭和村に位置する大字（自然村であり、以下、「ムラ」とする）の一つ、「両原」における嫁の里帰り慣行に注目し、その伝統的な実態を報告する<sup>1</sup>と共に、他の族制慣行との連関を考察しながら、婚出した娘が生家との関係を強く維持する社会におけるその背景や慣行の本質を明らかにしようとするものであるが、研究の目的は二つある。

- ① 筆者が長年探究している研究テーマの一つであり、未だ成果の蓄積に乏しいとみられる畑作農村に固有な社会構造の解明を進める研究の一助とすること。
- ② 嫁の里帰り慣行をめぐっては、その長期性や定期性に注目が集まり、北陸地方に色濃い分布が確認される「センダクガエリ」や「バン」を中心に、本州中部の日本海沿岸地域における類似した慣行が主に研究対象となってきたと思われる。本州中部以外の、しかも内陸部における類似した慣行の存在や実態は報告に乏しく、特色や本質を明らかにする研究は十分に深められていないと認識する。

こうした研究史を踏まえ、従来、長期性や定期性の特色を有する嫁の里帰り慣行の存在が確認されていなかった東北地方内陸部に位置するムラにおける嫁の里帰り慣行の事例を示し、考察を加えて当該分野の研究を深める一助とすること。

### II 婚出した娘と生家の親との関係をめぐる文化人類学的研究史の要点

本事例を考察する手がかりを求め、先に当該分野の研究史の概要を振り返ってみたい。筆者が認識するところでは、娘とその生家の親との関係を、「家」の枠組みを越えてとらえることによって、日本の家族を再検討する＝娘が持つ意味から日本の家族を再考することを目的に、この分野のそれまでの研究を振り返りつつ、特に「シュウトノツトメ」に関する調査を深め、変化していると言われる現代の家族の研究も視野に、研究上の新たな視点を開拓したのは、植野弘子や蓼沼康子などの研究者グループであるので、その業績に抛りながらまとめてみたい。<sup>2</sup>

### A 嫁の里帰り慣行に関する研究とその意義

嫁の里帰り慣行をめぐる研究の基礎を築いたのは、瀬川清子とみられる。瀬川は、嫁が生家との強い経済的紐帯を維持し、生家に依存する各地の多様な形態を明らかにした。

大間知篤三は、身柄も所有物も完全に婿方の人間になりきっていない嫁の実態に注目し、嫁入婚が段階的に完成するとの認識の下、過渡期の慣行として嫁の里帰りを理解した。

土田英雄や長谷川昭彦は、特に婚姻と労働力の関係に注目し、北陸地域の「センダクガエリ」や「バン」に関する実証的な研究を深めた。

同様に、「センダクガエリ」や「バン」に注目した中込睦子や蓼沼康子の研究は、他の生家訪問慣行の形態と家族関係との相関の考察に、比較資料として重要な意味を持つと植野は評価している。

### B 「オヤシマイ」、位牌分けに関する研究とその意義

さらに植野は、他の生家訪問の慣行として、牛島巖や中込睦子、堀内真などが注目した「オヤシマイ」や位牌分けに関する研究は重要であり、こうした慣行において見出される娘と生家との関係は、家父長的な「家」制度にみられる女性のあり方とは異なり、娘が生家との関係を強固に維持することを明らかにするものであって、婚出した娘と生家の親との関係がどのように展開するか、また、婚出していく娘が親に対してどのような役割を果たしているのかを考察する上で、示唆に富むことを指摘している。

### C 「シュウトノツトメ」に関する研究とその意義

植野に拠れば、しかし、嫁の里帰り以外の慣行は、ほとんど考察が行われていないとも指摘し、特に、「シュウトノツトメ」に対する注目の意義を説いている。この慣行は、新潟・山形県境付近で伝統的に行われてきたもので、蓼沼は以下のように紹介している。

「嫁入り後に嫁となった女性が夫を伴って、その生家を毎夜のように訪問すること。…「ユウシに行く」（ユウシは夜なべ仕事の意か）とか、「遊びに行く」などともいわれる。…村内婚率の高さがこの慣習を成立させていた。この慣習は嫁が主婦権を得るころには終了する。これらの慣習は、嫁と嫁の生家との密接な関係を表すものであり、…」<sup>3</sup>

この慣行をめぐる研究や見解としては、以下のようなものがある。古くには、瀬川清子が、妻問婚のようだとコメントしている。大間知篤三は、かつて婚舎が嫁方に置かれていたことの遺風と捉えた。坪井洋文は、婿入婚と嫁入婚の接合形態として理解しようとした。

江守五夫は、嫁の「実家への労役奉仕」とし、年期婿と同系列のものとしている。清水昭俊は、婚姻直後の夫婦の「両属」を示す事例とした。

これに対し植野は、「<シュウトノツトメ>では、夫婦が婚舎とするのはあくまでも夫方であり、また妻の生家で行う労働は義務的といえるようなものではない。他地域の資料をも比較検討するならば、こうした生家訪問には、娯楽・休息あるいは交際の要素が強く、また冬季の生家での嫁の労働も生家への労働提供を主眼としているとは言い難い。<シュウトノ

ツトメ>を「労働提供」を目的としたもの、また過去の婚姻形態の残存としてとらえることは、この慣行の意味を見過ごしてしまうといえよう。…また村落構造との関連での議論は尽くされていない。」と批判している。<sup>4</sup>

その後、1990年代に入ると、山形県温海町越沢の事例を踏まえ、林研三が、「シュウトノツトメ」を当該地の家族・親族構造や村落構造との関連で分析し、これまでの研究にはない視点を開拓した。少し遅れて八木透は、山形県温海町と新潟県山北町で調査を踏まえ、特に、同族結合と婚家—生家関係との関連に注目して分析を行った。八木は、同族結合が比較的希薄な庄内の山村においては、イエ結合の核となるのは、婚姻によって生じるイエ結合であるとする一方、同族結合をイエ結合の原理とする山北町においても「シュウトノツトメ」がみられることは、異質なイエ結合を受け入れる社会的素地があると指摘した。

こうした先行研究に刺激された植野等は、まず「シュウトノツトメ」に重きを置いた調査に着手する。慣行の分布の広がりを確認すると共に、「シュウトノツトメ」と「センダクガエリ」や「バン」のような嫁の里帰り慣行との差異を明らかにし、その意味の検討が深められた。植野は、いずれも嫁が生家に帰る点では共通するが、特に、以下の二点で大きな差異があるとしている。<sup>5</sup>

① 嫁が生家に泊まるか否か

② 婿が嫁の生家を訪れるか否か

そして、「シュウトノツトメ」と「センダクガエリ」をめぐる比較研究の成果として、二つの慣行が同じムラの中に併存しないことを指摘すると共に、以下のような差異を明らかにしている。

表1 「シュウトノツトメ」と「センダクガエリ」の差異

	シュウトノツトメ	センダクガエリ
嫁と婿との関係	継続 = 夫婦関係重視	一時的断絶 = 親子関係重視 (婿と婿の親、嫁と嫁の親)
本分家関係の基本 = 上下的家関係との整合性	矛盾	整合
「家」制度において重視される 家族関係の原理 = 親子関係との整合性	矛盾	整合
家族内での男性を中心とする 上下関係との整合性	矛盾	整合
嫁の生家との経済的依存関係	なし	あり (生家に全面的依存)
嫁と嫁の両親との情緒的關係	維持	顕著に維持
婿と嫁の両親との情緒的關係	成立	不成立
嫁の生家へ行くことの意味	骨休め	嫁が「実家に帰る」

※ 脚注2に紹介の文献、pp.129-141の記載内容を踏まえ、立柳が作成。

以上を総括すると、婚出した娘と生家の親との関係をめぐる文化人類学的な研究は、婚姻形態の変遷との関係で注目を集め、やがて、「センダクガエリ」や「バン」への注目と相乗しながら、特に婚姻と労働力の分配、ないしは移動との関係で深められていったが、1980年代頃から、他の生家訪問慣行との関連が問われるようになり、1990年代に入ると、家族・親族構造や村落構造との連関での構造機能分析が志向されるようになった。但し、イエ結合との整合性など、全般に「イエ(家)」の概念を念頭に置いた研究が展開していた。しかし、2000年代に入ると、植野等に代表される「イエ(家)」にとらわれない研究が現れ始め、新たな視点に基づく研究の進化が期待されるようになったとみられよう。以下、こうした学史的な成果を念頭に、本事例に関する考察を進めたい。

### Ⅲ 調査地「両原」の概況<sup>6</sup>

福島県昭和村は、会津地域の西端、大沼郡の南部に位置し、山に囲まれた環境で、全国有数の豪雪地帯の中にある。川や溪流の流域に水田があり、その回りにムラが形成された。「両原」はその一つである。2010年8月現在も田は15haで、野菜類を作る常畑は2haである。ムラ内は、各々数戸からなる五つのムラ組が組織され、それぞれに組長が置かれているが、任期一年の順番交代制である。これを束ねるように、ムラの代表として1名の区長がムラの総会で選出される。区長は、輪番制ではないが、1年交替で各戸が持ち回る仕組みである。紙面の都合で小括すると、「両原」の全般的な経済的・社会的・文化的特色として、三つのことを指摘できると思われる。第一は、豪雪地帯の過酷な自然環境の下、伝統的には畑作と

炭焼き、限られた水田を使った稲作を主たる生業として暮らしてきた経済的に小規模な山間農村の姿である。第二は、突出した政治力や権威、経済力を有する家が見当たらず、何事も順番交替制を基本とした運営が行われる傾向がみられることである。親族関係も本家による統制が弱く、祖先中心的な親族の組織化は脆弱である。第三は、姻戚とみられる「エンルイ」とのつき合いや位牌分けの慣行に端的なように、姻戚である家同士の結びつきが強く、日常生活上の互助協同にも機能して長く維持されることである。

第二と第三の特色は、「両原」というムラの社会構造全般を視野に、構造機能連関の観点から当地の嫁の里帰り慣行を考察する上で要点になると見通すことから、概要を後述する。

#### IV 「両原」の嫁の里帰り慣行の実態と特色

「両原」の嫁の里帰り慣行の伝統的な実態は、表2に示す通りであるが、一年を通じて頻繁かつ定期的に繰り返されてきた様子がわかる。「四日礼（正月4日）」、「二十日正月」、「節句礼（3月4日、5月6日、9月10日、10月1日）」、「彼岸（春と秋）」、「サツキヤスミ（6月の田植え終了後）」、「盆」、「秋づき（11月下旬）」が主な機会であったと伝わるが、ほぼ毎月のように里帰りの機会があったことが判明する。筆者が調査したところでは、概ね昭和30年代までは、こうした伝統的なあり方が保持されていたとみられる。その後の状況をめぐっては、少しずつ廃れていったとする見解が大半であるが、「確かに泊まることはなくなったが、だいたい昔からの里帰りの機会に車を使って実家に行ってくる」といった言説に象徴されるように、今でも続いているとする見方もある。

なお、例えば、「二十日正月」にはモチ、「節句礼（3月4日）」にはアラレ、「節句礼（5月6日）」にはササマキ、「彼岸」にはボタモチ、「秋づき」には米など、里帰りに際しては、折々の季節の食べ物を実家に持参する習いであった。

注目されることは、里帰りする期間であり、多くの場合は、1～2晩泊まってく程度であるが、「二十日正月」、「秋づき（11月下旬）」に際しては、「好きなだけ泊まってくる」と称するほどに、10～20日も泊まってくことである。新米の嫁ほど長く泊まり、主婦に近くほどに、宿泊する日数は短くなったと伝わる。なお、里帰りするのは基本的に嫁だけであるが、子どもが小学生くらいまでは一緒に実家に連れていったという。この間、嫁は実家で針仕事に励み、自分と子どもの衣類を調える。これらはすべて嫁の実家が負担する習いであった。こうした里帰りが、実家の親が亡くなるまで続けられていた。

また、里帰りの意義や理由をめぐっては、「シュウトツカレ（「夫の両親との共同生活で生じる気疲れ」といった意味）を癒す」、「嫁の実家とのつながりを大切にする」、「嫁の実家との関係を強くする」といった言説が聞かれる。

こうした実態や特色を、学史上、多々注目されてきた「センダクガエリ」や「バン」、「シュウトツトメ」と比較した場合、明らかに「センダクガエリ」や「バン」と類似している。<sup>7</sup>

しかし、微妙に異なっており、注目されるのは、嫁が里帰りする際に、婚家が嫁の生家に対する土産を持たせている点である。筆者が調査の中で得た言説を総合すると、“すでに我が家（婚家）の一員となった嫁が面倒をかけるので、その分の埋め合わせ”、“嫁の実家とのつながりを大切にしたいので、心遣い”といった意味があるとみられるが、嫁の婚家にも何らかの経済的な負担があることがわかる。

表2 嫁の里帰りの実態

時期、または、機会	滞在日数
四日礼（正月4日）	1～2日、または、3～4日
二十日正月	2週間くらい、または、10～20日
三月節句（3月4日）	1～2日、または、3～4日
春彼岸	1～2日、または、3～4日
五月節句（5月6日）	1～2日、または、3～4日
サツキヤスミ（6月の田植え終了後）	1～2日、または、3～4日
盆	1～2日、または、3～4日
九月節句（9月10日）	1～2日、または、3～4日
秋彼岸	1～2日、または、3～4日
10月1日	1～2日、または、3～4日
秋づき（11月下旬）	2週間くらい、または、10～20日

## V 「両原」の族制慣行の実態と特色

福島県の会津地方は、同族の分布が色濃い地域として知られてきた。特に「マキ」という民俗語彙で呼ばれる事例が間々存在することから、「イエ（家）」規範が強く保持された本分家の序列関係が厳格である典型的な同族のイメージで捉えられ、しかも、それが村落統制の上で中心的な機能を有するものと考えられて、ムラの社会構造全般を分析するに際し、第一義的に注目されることが多かったと認識する。

そこで、予備調査の段階で、「両原」にも同族と思われる集団が存在してきたと把握されたことから、筆者はその特色を明らかにすることを一つの柱に据えてその後の調査を進め、様々な族制慣行を把握し、それらの相互連関を考察してきた。ムラの社会構造全般を視野に、構造機能連関の観点から当地の嫁の里帰り慣行の特色や本質を考える上で、見落とせないと考えられる族制慣行としては、以下のようなものがある。

### A ムラ・村内婚的嫁入婚と直系制家族

「両原」の伝統的な婚姻のあり方は嫁入婚であるが、当地の代表的な郷土史家である羽染兵吉は、婚姻成立までの経過を次のように紹介している。<sup>8</sup>

「…昭和村の中では多少の違いはあったが、似通った方法で結婚式、及び披露宴が行われ

て来た。仲人を務める人は、それなりの器量を持ち合わせた人で、社会の事も広く考えている人であった。双方へ何回も足を運び、情報を提供し、意思の確認を諮るのである。…仲人が思うように行くとは限らなかったようである。…現在のように、晴れて恋愛のできる時代は戦後からである。身内の人が話をまとめ、仲人を頼むケースも結構あったようである。」

筆者は、羽染の言う仲人の詳細について、十分な調査を行えなかったが、特定の家筋に集中したり、偏ることはなく、その時代、ムラの中で人望のある個人とその配偶者に依頼することが多かったとみられる。また、豪雪地帯の冬場に徒歩の移動は大きな困難を伴う。よって、自ずと近隣に適切な相手を探したことが理解される。表3は、23の調査対象戸の内、22戸から得られたデータから、現世帯主夫婦（世代深度=0）を起点に、過去3代（親世代=+1、祖父母世代=+2）の世帯主夫婦の内、配偶者の生家の実家の所在がわかるものについて、どのような地理的範囲に位置するか、事例数を集計したものである。

表3 「両原」の通婚圏

世代深度／範囲	ムラ内	昭和村内	郡内	県内	世代別事例数
+2	2	12	0	1	15
+1	4	10	2	1	17
0	9	11	1	0	21
総事例数	15	33	3	2	53

過去3代のムラ内婚事例の割合は、約28%。同様に昭和村内婚事例の割合は、約56%。両方を合わせると、85%に迫る数字となる。筆者の調査によれば、特に、隣ムラである「大芦」の様々な家との通婚が多く、その他の昭和村内のムラも、概ね徒歩で30分～1時間弱の範囲に位置するものばかりである。結局、嫁の実家と婚家との物理的な距離は短いのである。頻繁な嫁の里帰りが実現した背景の一つは明らかであろう。

なお、23の調査対象戸のデータから見た場合、こうして形成が始まる「両原」の家族は、伝統的な実態と理念=家族形成の理想とされる規範から判断して、例外なく直系制家族である。嫁が実感する「シュウトツカレ」の背景も理解される。

## B 親族とされるもの

### 1 シンルイ

「本分家のこと」、「特別に親しい親戚」、「いつまでも切れない関係」、「お墓が隣り合っている家」などと説明されるが、実態は表4の通りである。

表4 シンルイの実態

n = 57

関係	実数	
本分家関係の家と それを介して つながる家	本家	1
	本家の本家	2
	分家	4
	分家同士	5
	分家の分家	4
	本家のシンルイ	2
	小計	18
地縁関係の家	五軒組の家、または、元五軒組の家	7
	ジワケ（ジワカサレ）シンルイ	4
	小計	11
姻戚関係の家と それを介して つながる家	姻戚の家	9
	姻戚の姻戚	1
	姻戚の家の本家	1
	小計	11
その他	同業仲間	1
	シンルイになることを依頼された家	2
	同上の分家	2
	養子を出した家	1
	小計	6
詳細不明であるが、先祖代々シンルイとしている家	11	

## 2 ジワケ（ジワカサレ）シンルイ

「一緒に使っていた土地を分け合った家同士」、「屋敷地を分け合った仲間」、「山林など、共有地を持っている家同士」、「シンルイと同じよう」などと説明されるが、実態は表5の通りである。

表5 ジワケ（ジワカサレ）シンルイの実態

n = 2

事例番号	構成戸（世帯番号）
①	32（H姓）、35（I姓）、44（I姓） ※ 35と44は、そもそも32が所有する土地で、その耕作を手伝っていた。32の分家とされる。現在は、44の分家も仲間に加わっている。
②	36、41 ※ 36と41は、かつて屋敷地を分け合った。

## 3 イチシンルイ

「特に懇意なシンルイ」、「葬式の時、喪家に代わって葬儀の準備を差配する家」、「隣の家」などと説明されるが、実態は表6の通りである。

表6 イチシンルイの実態

n = 19

関係		戸数
本分家関係の家とそれを介してつながる家	本家	7
	分家	2
	本家のイチシンルイ	2
	小計	11
地縁関係の家	五軒組の家、または、元五軒組の家	1
	ジワケ（ジワカサレ）シンルイ	6
	小計	7
不明		1

#### 4 同類 一対等的な本分家関係一

当地では、系譜の本末を相互に認識しあう本分家がありながら、その範囲は狭い。詳細は表7の通りであるが、複数の分家を有する本家は稀であり、確認される限りでは、最大で2戸である。また、共通に祀る神仏はなく、生業や日常生活の中で互助協同はみられるが、優先的に互助しあう状況や、本分家間で庇護奉仕的な付き合いがあったことも確認できない。総じて分家に際して本家からの財産分与は伝統的にほとんどないことも判明した。「マキ」の名称も聞かれず、「同族」に一般的な特色は認められない。さらには、いずれが本家であるかはっきりしないといった事例もある。

表7 両原の本分家関係

姓	構成戸（世帯番号） ※ +数字：世代深度
H 姓	36 + 8 ~ 9 24 + 7 12
	15 + 3 11 + ? 21
	43 + 1 13
H 姓と I 姓	32 (H 姓) + ? 35 (I 姓) + ? 44 (I 姓) + 2 46 (I 姓)
HN 姓と H 姓	45 (HN 姓) + ? 54 (H 姓) + 6 ~ 7 55 (H 姓) + 2 56 (H 姓) + ? 53 (H 姓) + 2 47 (H 姓)
I 姓	23 + 2 34
K 姓	26 + ? 25 ※ 25 + ? 26 とする説もある。いずれが本家かはっきりしない。

※ これまでに判明しているものだけを掲載。

上野和男は、従来、同族に比べて閑却されていた対等的な本分家関係であって、以下のよ

うな特色を有する親族組織を「同類」の名称で概念化している。

「同類は同族と同じように先祖を共通にすると意識しながらも上下的主従関係が著しくなく、祖先祭祀や生活の互助的側面において主として機能する親族組織であって、しばしば土地分割の地分け伝承を持っている。…次のような三つの特質を持っている。①ジワケはかつて田畑・山林などを分割した関係であって、現在でも田畑や山林が隣接している、②どちらが本家か分家かわからない、③ジワケは離れられない、逃げられない。…」<sup>9</sup>

当地の本分家関係は、これに酷似していることがわかる。本質において、その一種と捉えることが妥当であろう。

### 5 エンルイ、または、シンセキ

「かつて嫁や婿をやりとりした家」、「日常助け合う家」、「葬式はシンルイ、法事はエンルイ」などと説明されるが、実態は表8の通りである。

表8 エンルイ（シンセキ）の実態

n = 59

関係	戸数	
本分家関係の家とそれを介してつながる家	分家	1
	分家同士	1
	本家の姻戚	3
	本家のキョウダイ分	1
	本家のイチシンルイの姻戚	1
	小計	7
姻戚関係の家とそれを介してつながる家	姻戚の家	23
	姻戚の姻戚	27
	姻戚の家の分家	1
	姻戚の姻戚の分家	1
	小計	52

概ねこれまでに通婚関係が生じた家を指しているが、筆者の調査では、嫁や婿の実家の姻戚の一部が含まれる事例もある。交際の実態からみると、農作業の手伝いあいのほか、日常生活上の様々な場面での互助協力が図られる家である。また、法事を介した交際が繰り返される家でもある。末永く姻戚関係の家同士の交際や互助が続き、親族関係の一つの特色を示していると見られる。

### C 位牌分け<sup>10</sup>

当地では、伝統的に位牌わけの慣行が認められる。世帯主との関係がわかる分与された他家の位牌について調べてみると、妻方・母方の位牌の量・比率が約6割にも達することである。当地では、夫方・父方のみならず、妻方・母方を含めた双系的な祖先祭祀をよしとする価値観が潜在していると思われる。ここには、二つのことが意味されていると思われる。第

一は、その家の形成、発展に尽くした歴代の夫婦たちの総体が、その家の先祖として捉えられ、長く供養すべき対象として尊重されているとみられること。第二は、妻方や母方の親族、姻戚関係の家とのつながりが、長く意識されたり、維持される契機になっているとみられることである。「エンルイ」との共通性は明らかであり、もしくは、「エンルイ」が形成される動因と考えられよう。総じて、姻戚関係の家との結びつきを重視した親族の組織化を展開してきた当地の族制慣行との整合性が理解される。

## VI 考察と結語 —「両原」の嫁の里帰り慣行の背景と本質—

最後に、そうした他の族制慣行との連関や当地の生活環境・条件を念頭に置きながら、当地の嫁の里帰り慣行の背景を考察し、結びとしたい。かつて筆者は、畑作農村に一般的な社会的特色として、概ね以下のことを指摘した：

突出した権威や経済力を有し、支配的な立場に立つ家が成立しにくいこと、並びに、山間地の零細な耕地や寒冷などの過酷な自然環境、交通の不便さなどの影響で、ムラ内の各戸は、概ね対等な立場にあり、共有財産の平等な利用、輪番制、交替性、互惠性を基本とする自治の仕組みや、生活の様々な面での困難に対し、頻繁な互助協同を発達させる。<sup>11</sup>

これを踏まえると、既述のように、「両原」の実態は、ほぼそれに当てはまるものと理解されよう。同族の形成と本分家間での互助協同が発達しにくい状況の中で、過酷な生活環境の下で生き続けるための助け合いは、全戸を対象とする順番交替制の仕組みの整備と、様々な姻戚関係の家との間に張りめぐらされる強い結びつきの形成によって担保されるようになり、その関係を維持する慣行が発達したと考える。位牌分けの慣行共々、嫁の里帰り慣行は、そうしたムラの社会構造に適合的であり、機能連関する。当地の嫁の里帰り慣行は、正にその一つとして、特に、生存中の婚出した娘が生家＝婚家にとっては姻戚家との関係を強く維持する上で機能してきたと考える。また、IV章で、「両原」、もしくは、昭和村の嫁の里帰りにおいては、婚家にも一定の経済的な負担がある特色を紹介したが、筆者には、上述した畑作農村の互恵的な対応の現われともみえる。検証を進めていきたい。

最後に、今後の研究のあり方を念頭に、若干の見解を申し上げ、結びとしたい。本研究は、既述のように、学史的な流れから見れば、社会構造分析を目指した林研三や八木透の業績と類似したものとなろう。すると、特に、「イエ（家）」規範や上下的、序列的な秩序と整合的な同族の分布が伝統的に顕著な地域において、それとは原理的に矛盾するとみられる頻繁な嫁の里帰り慣行が、なぜ共存しうるのかを問うことは、極めて重要な意味がある。この点に関して、会津地方に隣接する新潟県で調査を行った八木は、（同族結合とは）異質なイエ結合を受け入れる社会的素地があるとまでは指摘したが、そうした素地がなぜ生まれてくるのか、十分には解明していないように思える。筆者は、この点をめぐって、「両原」の知見が検討のヒントを与えていると思えてならない。それは、本分家関係、すなわち、同族的なも

のではなく、系譜の本末を互いに認識しつつも、主従的ではなく、対等的な立場となる本分家関係＝同類の成立がありうるという事実であり、しかも、それが本分家を必ずしも優先せず（本分家関係に拘束されず）、姻戚家との関係強化や拡大を図る動因になるとみられることである。果たして、同類はなぜ、どのように成立するのか。この点の探求が一段と重要なものとなろう。本論文では、豪雪、山間、零細な畑作農村の生態的・経済的な条件に着目して考察したが、社会形成において、縦（上下・主従）の原理が重視される地域において、横（対等・輪番）の原理がどのように組み込まれるのかを問う視点が、会津地方のみならず、特に東北地方において、同族の分布が比較的希薄な地域や姻戚関係の家との結びつきを重視する文化を有するムラに関する今後の研究に重要となるのではないか。長期性や定期的といった特色を伴う東北地方の嫁の里帰り慣行についての研究を、そのような関心も携えながら、一段と深めていきたい。

## 引用文献など

- 1 平成 22 年度科学研究費補助金基盤研究（C）MO21520823 によって行われた世帯調査・民俗調査から得られた資料に基づく。なお、調査の時期は、2010 年 5～10 月、調査対象戸は、全 31 戸（96 名）の内、23 戸である。
- 2 植野弘子・蓼沼康子、2000 年、「はじめに」・「課題—娘としての女性」・「家」と娘」、植野弘子・蓼沼康子編、『日本の家族における親と娘—日本海沿岸地域における調査研究』、風響社、pp.1-5, pp.13-21, pp.129-141
- 3 蓼沼康子、1999 年、「シュウトノツトメ」、福田アジオ・神田より子・新谷尚紀・中込睦子・湯川洋司・渡邊欣雄編、『日本民俗大事典—上』、p.818
- 4 前掲 2 に同じ。植野弘子、p.18
- 5 前掲 2 に同じ。植野弘子、p.20
- 6 信仰や年中行事なども含めたより詳細な概況を、以下の別稿に紹介している。  
立柳聡、2011 年、「奥会津地方一山間農村における位牌分けに関する考察」、『東洋大学大学院紀要—社会学研究科・福祉社会デザイン研究科』、第 47 集、東洋大学大学院、pp.45-56
- 7 当地では、伝統的には、祝言の翌日、新婚夫婦が揃って嫁の実家を訪れ、一晩泊まってくる慣わしであった。これを「ハツドマリ（初泊まり）」と呼んでいた。よって、夫婦で嫁の実家を訪問する機会がなかったわけではない。嫁が里帰りする意味をめぐって、「シュウトツカレ」という表現が用いられているように、微妙に「シュウトノツトメ」と整合する要素も垣間見られる。
- 8 羽染兵吉、1996 年、『両原の伝説と物語』、ふるさと企画、p.85
- 9 上野和男、1992 年、『日本民俗社会の基礎構造』、ぎょうせい、p.63
- 10 前掲 6 に同じ別稿で、実態を報告すると共に、背景や特色を詳細に分析した。
- 11 立柳聡、1996 年、博士学位論文「雑穀畑作文化論—東北日本畑作文化の地域性—」

# **A Study on the Parent-Daughter Relationships in the Oku-Aizu Mountainous Region**

TACHIYANAGI, Satoshi

The purpose of this paper is to solve the social background and peculiarity on the parent-daughter relationship in Ryohara, which is a community located in the Oku-Aizu mountainous region, based on *SATOGAERI* as custom of bride's visit frequently and long-term to her parents.

It is the accepted view that in Japan, these customs are distributed throughout the coastal districts of the Sea of Japan, especially in the central part of the Honshu. Then, how should we understand the case in Ryohara ?

My question was following particularly. the Oku-Aizu mountainous region is a part of the Tohoku district, in where *DOZOKU* as a typical descent group in Japan, which is organized by main family and branches, has a tremendous influence on how to plan and control community. Its principal is hierarchal between main family and branches, male-dominated, patriarchal. So bride must do her best for husband's family. But the essentials or principal of bride's visit frequently and long-term to her parents is the contrary because it means solidarity strongly among bride and her parents.

Based on my research, which paid attention to social structure, the reason or background of its why is three. Firstly, therefore the Oku-Aizu mountainous region in where snowfall is heavily, the life environment is severe for people. Accordingly they must help each other on various occasions in daily life, not only member of descent group but also a lot of affinity in the community and village. Secondary, the main families in Ryohara are lack of property and not good enough to control branches. Then the relationship among main family and branches are equal generally. The *DOZOKU* in Ryohara don't have influence on planning community. These type of *DOZOKU* is called *DORUI*. Maybe this is one of it. Thirdly, there are close bonds of help each other between affinitive families in daily life. Generally, peoples in Ryohara regard affinity.

Under such situation, *SATOGAERI* conforms to the social structure of Ryohara in principle. So peoples have accepted the custom positively and maintained. It is my

conclusion.

**Key word:** affinity, *DORUI*, mountainous region